

KEIO SFC REVIEW



特集
SFC生の進む道

未来創造塾シリーズ第一弾
「失敗伝説」プロジェクト

環境情報学部准教授 三次 仁
環境情報学部教授 今井 むつみ
おとなりの研究会

総合政策学部専任講師 水鳥 寿思
総合政策学部教授 中山 俊宏
ようこそ、新任教授

関山 和秀
sfcism

看護医療学部准教授 トーマス・ハーディ
When I was young

No.

57

Table of Contents

特集

| | |
|----------------------------|----|
| S F C 生の進む道 | 02 |
| ～キャリアはいかにしてつくるか～ | |
| 高橋 俊介 政策・メディア研究科特任教授インタビュー | 04 |
| OB・OG が選んだ道 | |
| 企業編 / 官庁編 / 進学編 / 起業編 | 06 |
| ～学内の就職・進路支援を活用しよう～ | |
| 就職・進路支援担当オフィス | 14 |

未来創造塾シリーズ第一弾

| | |
|--------------|----|
| 「失敗伝説」プロジェクト | 16 |
|--------------|----|

連載

| | |
|------------------------------|----|
| おとなりの研究会 | 18 |
| 三次 仁 環境情報学部准教授 | |
| 今井 むつみ 環境情報学部教授 | |
| sfcism | 22 |
| 関山 和秀 2007 年政策・メディア研究科修士課程修了 | |
| When I was young | 26 |
| トーマス・ハーディ 看護医療学部准教授 | |
| ようこそ、新任教授 | 29 |
| 水島 寿思 総合政策学部専任講師 | |
| 中山 俊宏 総合政策学部教授 | |
| Abstract SFC REVIEW 57 | 34 |
| From Editor | 36 |

特集

SFC生の進む道

SFCではさまざまな分野の第一線の知識を得ることができる。それだけに、私たちSFC生は将来の進路に悩み、戸惑うこともある。自分が打ち込んでいる研究をそのまま将来の仕事につなげたいと思っている人もいれば、まったく別のことを考えている人もいるだろう。この特集では、SFCでキャリア論を教えている高橋俊介政策・メディア研究科特任教授の他、4名のOBの方々に話を聞く。中央公論新社で編集者の職に就いている石川由美子さん、厚生労働省の広報室長である宇野禎晃さん、大学院博士課程で異文化コミュニケーションを研究している伊藤綾香さん、そして株式会社ロフトワークを立ち上げた諏訪光洋さんの4名だ。彼らはどのように将来を考え、決断したのだろうか。また、SFC生の進路指導に直接関わってきた、就職・進路支援担当（通称 CDP オフィス）も紹介する。

P.04

～キャリアはいかにしてつくるか～
高橋 俊介 特任教授
インタビュー

OB・OGが選んだ道

P.06

石川 由美子さん…企業編

P.08

宇野 禎晃さん…官庁編

P.10

伊藤 綾香さん…進学編

P.12

諏訪 光洋さん…起業編

P.14

～学内の就職・進路支援を活用しよう～
就職・進路支援
担当オフィス

～キャリアはいかにしてつくるか～ 高橋 俊介 特任教授 インタビュー



高橋 俊介

(たかはし・しゅんすけ)

政策・メディア研究科特任教授
専門は人材育成やキャリア形成、
経営視点の組織人材マネジメント

— SFCで高橋先生は「仕事と社会」という授業を担当されていますが、どのようなことを教えていらっしゃるんですか。

一言で言うと、社会が変化していくことよって仕事の内容や働くということが変化してきているということをお伝えしています。職業キャリアと人生って切っても切れない密接な関係ですよ。もちろん人生って仕事だけではないんですけど、どう仕事をするかによって人生が大きく左右されます。社会のどのような変化が労働の仕方や仕事の内容にどのような影響を与えているかということを理解してもらおうという趣旨です。

— キャリアって、どういうものなのでしょう。

変化が激しい一方で、専門性が求められるような世の中を生きていくためには、変化し続ける状況に柔軟に対応することが必要です。結局のところ、完全に自分の思い通りの人

生というのはつくることができません。だからといって受け身のキャリアア人生を送れるというわけではなく、プロセスにおける主体性が重要なのです。日々どう仕事をし、人と付き合い、スキルアップをしていくかというのを主体的に模索していけば、結果的に主体的なキャリアができていく。たいていの場合、最初から明確な目標に向かって計画的にキャリアをつくっていくというわけではないのですよ。

山登りでたとえると、富士登山では麓から目指している山頂が見えていて、あそこに登ろうという目標が明確なわけです。ところが丹沢など多くの登山では自分たちが目指している山の山頂がどこなのか、麓からは見えないんですよ。とりあえず上に登って行くわけです。しばらく行くと小高いところに出る。向こうを見ると稜線がずっと続いていて、じゃあそっちに進んでみよう。そうして進んで行くとまた小高いところに出てくる、それを何回か繰り返しやっと思指していた山頂が見えてくる。そんなイメージに近いんで

すよ。最初から自分が目指すべき目標は見えてないということです。

——スタートの時点から目標を掲げ、それに向かって頑張ろうというのいいのではないですか？

そうですね、それにしてもまずは自分を知ることが大切です。人には各々自然に無理なくできることと、無理しないとできないことがあります。自分はどういう人間なのかを理解すること、これが重要なんです。たとえば営業の仕事に自分が向いているかどうかには社交動機というものが関わっていて、それが強い人はたしかに営業に向いているんですよ。一方で社交動機は弱いけど達成動機は強い、という人もいます。そういう人は、「絶対にあの客を落とすんだ」とか、「売り上げ目標を絶対達成してやる」と思うとすごくやる気が出てくるんですよ。やる気は自分で引き出すんです。利き手利き足があるように、心的機能にも利き手利き足があって、それを使って成果を出せばオーケーなんです。今

やっている仕事我希望した仕事でなくても、この仕事で自分らしくやって成果を挙げるためにはどうすればいいのかを考えるのが大切なわけです。そうすると自分が今やっている仕事を自分に向いている仕事に変えてしまうことができます。それらは自分を知っていればできるはずなんです。

だからどの職種に就くかより、どんなタイプの会社に就職するかのほうがずっと重要なんですよね。同じ職種だつて、若い人たちに教えないでただひたすらやれと言つてこき使いう会社と、若い人たちに自由にチャレンジさせてくれる会社だったら、自由にチャレンジさせてくれる会社に入つたほうが成長できますよね。それは業界や職種が同じでも、会社によつてちがうんですよ。

一度の選択で人生が決まるわけではなくて、いくつかのフェーズがあります。そのフェーズごとに方向性をどう切り替えていくかが大事です。必ずそのフェーズはやってくるわけですから。そこで次のステップをどちらに踏むかで人生が次第に

き上がってくるわけです。

——仕事をする上で大切なことはなんでしょうか。

仕事観には「内因的仕事観」「功利的仕事観」「規範的仕事観」の三つがあります。「内因的仕事観」は仕事は自分にとつてどういう意味があるのか、つまりやりがいや成長を感じられるかという考え方です。「功利的仕事観」とはお金を稼ぐために仕事をするとか、仕事を通じてお金持ちになりたい、有名になりたいというような、仕事を手段として何かを成し遂げたいという考え方です。これは誰にだつてあるわけです。「規範的仕事観」というのは、仕事つてもそも自分のためではなく、だれかのためにやるものだという考え方です。

人々はお互い様の関係で生きていて、だれか他の人のためになることをやって支え合っているのが社会なんです。でも何か特別なスキルがないと大して役に立てないんです。だからこそ成長する必要がある。成長

すればいろんな人の役に立てる。「あなたにとつて仕事は誰のためにやるものなのか」、「どんな付加価値をもたらすのがあなたらしい仕事の仕方だと思ふのか」、これを考えてほしいんですよ。でもスキルを身につけないと大した価値が生まれません。価値が生まれ出せるようになるまで頑張つて働いて成長してくださいという事です。そうすると、どうすれば自分が社会の役に立てるのかという事が徐々に見えてくるようになります。それは社会に出て何年後になるかわかりませんが、いずれ見えてきますから、焦らないで試行錯誤してみてください。「内因的仕事観」も「功利的仕事観」も重要だと思いますが、自分がどういう価値を生み出せるのかという「規範的仕事観」のことも考えていかないといけないと思います。

OB・OGが選んだ道

企業編



石川 由美子
(いしかわ・ゆみこ)

2010年環境情報学部卒業
2012年政策・メディア研究科修士課程修了
2012年に中央公論新社に入社

——石川さんの簡単な経歴について
教えてください。

高校生の頃は漫画家になりたいと思っていました。将来は美術大学か専門学校に行きたいなあとはんやり考えていた頃、萩尾聖都さんの『トーマの心臓』や『ポーの一族』という漫画を読んで、自分がそれまでに読んでいた少女漫画とは全く隔絶した世界観にすごく衝撃を受けました。私は少女漫画家になりたいと思っていただけ、到底これらを読みこなしたとは思えなかつたんですね。萩尾さんが書いているものの背景にある、死生観や人間観などの哲学的なことを理解できなければ、もし自分がこのまま漫画家になれたとしても萩尾さんのレベルには到底届かないと思って、総合大学に行くことを決意しました。そこで、AO入試をつかってSFCに入学し、一年生の春学期から堀茂樹研究会という、哲学書を輪読するゼミで勉強をはじめました。

しかし、四年生になったときに漫画を全然書いていない自分がいて、「私は何になりたいのかな」と悩んでいました。周りは三年生で就職活動をはじめましたが、私は何もしないでいたんですよ。それでどうしようと思っていたら、四年の秋学期に、以前新潮社で編集者をやっていた松家仁之さんが特別招聘教授としてインタビュー法という講義を持っているのを知りました。その授業を学期のはじめに見学したら、雷に打たれるぐらいの衝撃的なおもしろさ！松家さんについても編集者という仕事についても知らないまま、勢いでその授業をとってみただけです。そうしたら、こんなに魅力的な仕事があるのかと、そこで初めて自分がなりたいと思える職業を見つめました。そのとき、私は大学院に行くことは決まっていたんです。だから大学院に入ってから就活をして、中央公論新社の編集者になりました。

——働く前と働いた後で、編集者のイメージは変わりましたか？

学生のときは、作家と膝と膝を突き合わせて、雑誌でも本でもつくれたらいいなっていう思いだけでしたね。それが単行本なのか雑誌なのかっていう媒体まではちゃんとイメージできていませんでした。その

思いを裏切るかのように、入社して初めて担当した本が、私がイメージしていた編集の仕事とかけ離れていく「中山道」というガイド本でした。地図をゼロから作ったり、対談のセッティングをしたり、ロケハンをしたり……。新人編集者として右も左も分かっていない時期に、こういったイレギュラーな本を任されて、正直ものすごく動揺しましたし、失敗もたくさん経験しました。でも、作家にとって編集者はほぼマネージャーみたいなもので、ありとあらゆる編集業務の可能性を見せてもらえたという点で今ではすごく感謝している思い出深い一冊ですね。その経験は今にすごく活かしています。

その言い方は、言葉の選び方ひとつをとっても緊張感を強いられるし、毎回「もつとこう言えばよかった」とか「こんな言い方は失礼だったな」という反省はあります。しかし、そういうことを乗り越えて一冊の本ができあがると、たまらない達成感がありますし、とても嬉しいのです。

——自分の進路や将来の夢が定まらないまま就職活動をする学生もいるのですが、石川さんはギリギリまでの自分のやりたいことを探していらしたのですね。それはある種勇氣のいる決断だと思うのですが、葛藤などはなかったのでしょうか。

学部三年の頃は、まだ自分に時間があると思っていました。まだ漫画を書いて出版社に投稿する時間はあるなど。多分そのときは、就職するかどうかっていうよりも、漫画家になりたいっていう夢をもっているのに、その夢にたいして「ミミも進んでいない自分に戸惑っていたんです。漫画家になりたいんだたら一日一枚でも漫画を描けばいいのに、入学してから全然漫画を描いていないくて本ばっかり読んでいる自分が

たんです。「あれ、私って漫画家になりたいんじゃないの？だけども何もしていないのはなんで？」っていう疑問に苦しんでいました。そこで、自分がやりたいことは漫画を描いてお金をもらうことじゃないかもしれないっていう、周りの就活生とは全然違う悩みでしたばたしてました。

四年生になっても就きたい職業が見つかっていませんでしたが、なんとなく出版企業の説明会には行きました。そこで、「編集の仕事に就きながらも漫画を描くことはできますか？」なんてことを質問して企業の人にスルーされるということもありました(笑)。結果、「私はこのまま就職しても意味がないな」と思って、就職活動を何もしなかったんです。でも、「私はこれからどうするんだろう」って苦しかったですね。そんなときに松家さんに会って、編集者になろうと決意できました。だから松家さんに会ってなかったら今の私はいなかったと思います。

私をはじめ漫画家になりたいと思っていた理由は、絵だったら苦しくても描いていられると思っただからなんですよね。大学時代のときに絵を描くアルバイトをしていた時期があつて、つらいこともあつたんですけど、そのつらさも楽しかった。そういう意味では、絵を描くことは職業にしていけないけれど、自分にとって特別なものなんだと思います。何かの職に就くなら、苦しいときがあつても楽しいと思えるようなものがある。何かをするのが楽しいから続けるっていうのは当たり前で、その楽しいが苦しいになったときでもそれをやり続けたいと思えるものが職業になつたら幸せだと思います。私は本を読んだり考えたりすることが絵を描くことと同じくらい好きだったんですね。編集者になつたときでも、文章を限られた時間でたくさん読まなければいけないっていうのは苦しいけど、それは私にとって他の職業よりは楽しいものだと思います。自分の時間が有限であることに気づいてほしい。そしてその時間を、自分がしていて楽しいと思えることを探すのに使ってほしいなと思います。

官 庁 編



宇野 禎晃 (うの・よしてる)

1994年総合政策学部卒業
1996年政策・メディア研究科修士課程修了
現在厚生労働省大臣官房総務課広報室勤務

——宇野さんの簡単な経歴を教えてください。

高校生の頃から社会科学に関心があったのですが、経済学部へ進むと経済学しか学べませんし、法学部へ進むと法律しか学べません。どちらを選ぼうか悩んでいたときに、SFCという、複数の分野を横断的に学べるキャンパスができるという話を聞いたので受験しました。一期生として総合政策学部に入学しましたが、所々工事中の真新しいキャンパスの中で当時はまだ珍しかったメールのやりとりや、大教室で手をあげて発言できる自由な空気など、他の学部とは違うことばかりでとても楽しかったことを覚えています。

学部三年生のときに、当時環境情報学部教授だった金安岩男先生の研究会（ゼミ）に入りました。都市環境を学ぶ研究会で、私は日本のまちづくり政策に興味がありました。金安研究会はフィールドワークが多く、実務家とも会え、楽しい二年間でしたが、四年生の春学期のみは竹中平蔵総合政策学部教授の研究会を取りました。経済学は難しそうですがおもしろそうだったので他流試合

の気持ちで入りました。竹中研究会に参加している学生はみんな経済学を詳しく勉強していて頭の良い人ばかりだったので、経済学を半期だけ履修しただけの私は場違いで研究会についていくのも大変だなと感じました。でもそこで自分なりに真面目に勉強をしたところ、意外にも、研究発表の場で賞までもらえたのです。竹中先生がよくおっしゃっていたことは、研究に必要な高度な分析方法の知識も大事だが、忙しい相手に対し短時間で自分の研究の結論や意義を伝えるかがより大事なことでした。大学院へ進学後は、竹中先生の下でマクロ経済モデルを研究し、修士号をとりました。

その後の就職活動では、シンクタンクと当時の労働省の内定をいただきました。どちらを選ぶか悩み、竹中先生から紹介していただいた専門家の方々に相談しました。すると、普段は政府に批判的な方々までが、「労働省が良いに決まっている」と言われたのに正直驚きました。シンクタンクは決まった政策を評価する仕事ですが、役所は実際に政策を企画立案するおもしろさがある。また、政府に集まってくる情報量の

方が圧倒的に多い、とのことでした。そこで、私は労働省、今の厚生労働省を選んだわけです。厚生労働省は、他の役所と異なり先輩が後輩に「さん」付けで呼ぶような職場風土があります。そのことも、選んだ理由の一つだったかもしれません。

——役所に入る前と入った後ではイメージは変わりましたか？

霞が関というと、当時は今以上に国立大学出身者が中心で、本当にやっていたのかなといった不安はありました。でも、実際入ってみたら、SFCで学んだことは公務員の仕事でも活かせることに気づきました。霞が関で求められる能力は、担当する政策課題に対し、速やかに問題を発見し、関係者の理解を得るよう粘り強く説明し、諦めずに合意形成を図る、というものです。いろんな課題に対して何が問題かを発見し解決策を考え、理解を得るよう説明するという、SFCの問題解決型の授業と似ていますよね。私はSFCの学生たちは役所の仕事に向いているんじゃないかなと思います。

役所の仕事は「暇そう」とか「前

例と同じ仕事の繰り返し」などのイメージがあるかもしれませんが、全く違います。昔に比べると、仕事の環境はよくなりつつありますが、ハードワークで若いときほど体力勝負な面があります。また、前例に囚われない知恵やアイデアを生み出すことが求められます。私たち役人は、大臣や国会議員を支えているスタッフのような立ち位置ですが、新しい政策の企画立案を求められますし、政策次第では社会を大きく変えることができます。厚労省も今まで、男女雇用機会均等法や週四十時間労働などの政策を通じて、日本の労働環境や社会を大きく変えてきました。私たちの社会を良くしたいと思ってるSFC生はたくさんいると思いますが、そういう人がもつと多く政府に参加していただくと、霞が関ももつとおもしろくなると思います。今もみなさんの先輩は多く入っていますし、厚生労働省には女性の方も多く入っています。(※写真右の方には二〇〇八年総合政策学部卒の山崎博子さん)

——将来のことについて迷っているSFC生はたくさんいると思います。

私が学部生のときにも、大学で学んだ知識を活かした仕事に就きたいと思っていました。正直言って、学部生の専門知識レベルのみでは社会で太刀打ちすることは難しいし、社会は大きく変動しますから、大学で学ぶ知識は古くなります。しかも、確かに私のときは一部上場企業に入ればそのまま安泰だという考えがありました。ここ二十年で多くの大企業が消えるなど、五年後十年後先のこととは分からない社会になりました。むしろ、新しい専門知識を常に吸収する手段や問題発見・解決の手法、それをわかりやすく説明する手法をSFCの授業を通じて身につけていく方がどこに就職しても通用すると思います。

竹中先生は「誰にでも人生には三回ぐらいチャンスがある。そのチャンスが来たときにチャンスを確実に掴むことが重要だ」とよくおっしゃっていました。今思うと私の人生にも「チャンス」があったのだと思います。私だって、四年生のとき

に竹中先生に会わなかったら、研究発表で賞をもらわなければ、厚生労働省に入省してなかったかもしれません。

人生って予定調和ではなく、常に新しい経験をしながら変わっていくのでおもしろいのだと思います。なにをしたらいいか分からないと悩んでいるくらいだったら目の前のことに前向きに取り組み、来たる「チャンス」に備えてほしい。そして、学生時代に学生でしか経験できないことをいかにたくさん経験することが重要だと私は思います。社会に出ると、学生でしかできない経験はしたくてもできません。大学生活をエンジョイして、関心のあることに没頭して、多くの人との出会いを通じ、どんどん経験値を貯めてください。就活でしか学べないこと、社会に出てから学べることはそのときに学べばよいですから。

進学編



伊藤 綾香
(いとう・あやか)

2008年総合政策学部卒業

現在政策・メディア研究科博士課程第一学年在籍中
研究分野は異文化コミュニケーション

——伊藤さんの簡単な経歴を教えてください。

二〇〇四年に総合政策学部に入學して、二年生の春から小檜山賢二政策・メディア研究科教授(当時)の研究會に所屬していました。大學に入るときにやりたいことが決まっていたわけではなかったのですが、とりあえずいろいろな分野の授業をとっていましたね。小檜山先生は長年PHSの開發に携わってこられた方で、元々ネットワーク関係を研究なさっていました。入ったきっかけは、二年生の頃に友達に誘われておもしろそうだった、という軽いものでした。交換留學をしたかったんですが、三年生のときに周りのほとんどが就職希望だったので、周りに流される形で就職活動をしました。それで四年生の春に就職を決めてから四ヶ月間ほどオーストラリアへ語學留學に行きました。そのときの経験をもとに、日本とオーストラリアの携帯電話事情の比較をテーマに卒業論文を書きました。

音楽や映画などのエンタテインメントが好きで、SFCで携帯電話についての研究をするゼミにいたとい

うこともあつて、卒業後は音楽系のモバイルベンチャー企業に就職して二年強働きました。しかし会社が本当に忙しかったんです。これといえる成功体験も経験できず、上司からも怒られるというような生活が続き、ちよつとめげてしまっていました。その思いと同時に、大學四年生のときにした語學留學とは違い、もうちよつとアカデミックな場所でも、英語を學ぶのではなく英語でしっかりと學ぶ経験をしたはずと思っていたことを思い出しました。そこで、転職よりも留學かも、と思ったんですね。時間に追われて仕事をすると、突き詰めてなにかを勉強してみたかった。当時は二十四歳だったのですが、奨学金制度などを調べていたら、その内の一つの年齢制限が二十四歳だったんです。とりあえず現地の大學で英語力をブラッシュアップして、次のキャリアアップにつなげるためには、今行動しないとだめだと思つた。それで仕事を辞める決心がついて、アメリカへ渡りました。

そのときは、せつかく留學するんだから後に使えるものを學ぼうと思つた。国際ビジネスとTESOL(テソル)という、日本で英語を教えることの

できる資格の、ダブルメジャーを専攻していました。そこでは学部四年間学ぶつもりで行ったのですが、二年目に東日本大震災があったんですね。私は幸いなことに家族も大変なことはなにもなかったのですが、周りの学生が私が日本人というだけで「かわいそうに、大丈夫か」とすごく言ってくれたんです。そのときは「ありがとう大丈夫です」とか言うんだけど、私が日本人を代弁しているのかと戸惑ってしまった。そんな日本人を代表するような大変なこと

してないだろう、という葛藤がずっとあったんです。そこでなにかしなくちゃと思って、現地の駐在員の友人たちと募金などの支援活動をするグループを立ち上げました。そのときに寄附の文化やコミュニケーションの仕方がなんで国や地域によって違うんだろうというところに興味がわいたんです。その支援活動を通して、「今後自分が突き詰めたこととは異文化コミュニケーションかもしれない。その研究を中心にしてそこからキャリアを考えよう」というふうに考えが変わっていききました。それでもう一回本気で大学院の受験を考えようと思って、結局アメリカ

カの大学を二年で中退して、イギリスの大学院で異文化コミュニケーションについて学びました。そして二〇一四年の春に日本に戻り、今はSFCの博士課程で、小川克彦環境情報学部教授の下で研究しています。

——異文化コミュニケーションとは具体的にどのようなことを研究なさっているのでしょうか？

違う国はもちろん、同じ国の人でも地方によって育った環境が違います。そういう、さまざまな国や同じ文化圏のなかで起こる微妙な差異に注目する研究なので、とても大きな分野なんです。ステレオタイプはどうやって作られていくのか、文化的なアイデンティティとは何か。アカデミックな学術分野として見るととても広いのですが、そのなかでいかに今まで誰も取り組んでこなかったテーマを深く研究できるかっていうのは、博士課程に進む人にとつての課題です。学部や修士のときは一般的なことも勉強しますが、博士課程まで進む人はそれじゃ意味がない。他の人がやってこなかったところに

価値を見いだす、そのニッチな点をたくさんつけて大きなアカデミックな分野をつくる、そういうビジョンのもとで研究することが多い気がします。研究活動なので正解もないし、期限もあつてないようなものです。仕事とは違って研究には本当に終わりがありません。逆に、研究しきったって思っちゃったら研究者として終わりという感じがしますね。

博士課程を修了した後のことは分からないですが、できれば大学で働けるといいかなと思いますね。海外では異文化コミュニケーションって体系化されていなくて、いろんな人がいろんなことを言うので、これが正しいというものがありませんよ。大学のカリキュラムも整備されていないところが多いので、カリキュラム編成のようなことに携わりたいいなと思っています。

——大学院進学と就職のどちらを選ぼうか悩んでいるSFC生はたくさんいると思います。

大学院に行きたいけど就職のことも悩んでいる人は、無理に大学院に進学しなくてもいいんじゃないかな

と思います。ちょうどいいタイミングでなにかイベントが起こったり人との出会いがあつたりするので、あまり構えないでほしいです。たとえ就職をしても、大学院に行きたいって再び思うのを待ってから行くのも全然遅くない。そもそも私は社会人経験をしてから大学院に戻ろうと思ったタイプなので、なぜ大学院に行くかという理由が、一旦仕事に就いてからのさまざまな経験を通して、展望が生まれてきたというのがあります。なので、はじめに目標ありきで考えなくてもいいかなと思います。

あと、大変だけど、最終的にはなんとかなるよ、とアドバイスしたいです。私は考えるより先にやってみようとするタイプなので、なにかに迷っているのであれば、後先のこととはそんなに考えずに、まずは踏み出してみるのも大事だと思います。あとは、私が一回SFCの外に出たから言えることなのですが、SFCはとても恵まれた環境です。学部生には、使えるリソースはすべて使ってほしいですね。

起 業 編



諏訪 光洋

(すわ・みつひろ)

1996年総合政策学部卒業

ニューヨークにてデザイナーとして活動後、

2000年に株式会社ロフトワークを設立

— 諏訪さんの簡単な経歴を教えてください。

SFCに進学した理由は数学と小論文で潜り込めたことと、デザインを学べそうだったからだだった。

SFCのカリキュラムの中で一番印象深いのは藤幡正樹さんというメディアアーティストの課外授業、つまり単位にはならないプロジェクト。デジタルと色を考えるプロジェクトで成果物として『カラー・アズ・ア・コンセプト』（藤幡正樹著、美術出版社、一九九七年）という本も出版された。今は絶版になっちゃったけど楽しくてよく覚えている。藤幡先生には卒業後「ああ君か。飲み会担当だったな!」と言われたけどね（笑）。就職活動の話をしよう。昔話だけど、応募方法はアナログに「はがき」だったわけ。五千枚以上のはがきがダンボールで届いて皆かたっぱしから書いていくの。僕はすぐ挫折しちゃってメディア業界の会社と広告代理店五社だけ受けた。自信があつたしコネも使ったりして、大丈夫だろうと思ったら軽やかに落ちちゃった。コネまで使っちゃった（笑）。今考えるとさすがにもうちよつと頑張った方が

よかつたと思う。反省してます。

それで落ち込んで湘南台のアパートで引きこもってた。そんな中JapanTimesっていう新聞で、「FMラジオ局を立ち上げます」っていう小さな自社告知を見つけてすぐ「働かせてください」って電話をしてみた。そしたら「とりあえず来い」ということだったので田町のオフィスに会いに行つたんだ。オフィスの片隅に「FM準備室」っていう暖簾がかかっていた、そこに「こんにちはー」って入ったのが結局僕の就職になった。

在学中からインターンがスタートしINGENというラジオ局のスタートアップが最初の職場になった。親会社は英字新聞社で、中にデザイナーが十人近くいてデザインやタイポグラフィを教えてくれた。クリエイティブやデザインに関わる仕事なら「やります!」って手をあげていたら、どんどん忙しくなって週に百時間働いていた。でも自分で選んだ環境だしエキサイティングだった。フリーペーパーや広告を二人で見よう見まねでつくり、その都度プロのデザイナーに怒られ、徹夜で直し、入稿する。WEBやシンブルもつくった。SFCで学んだプログラミングを使って音楽の検索システ

ムや広告枠調整システムもつくつていた。休み前になると徹夜が続きすぎて心臓が痛くなつたね(笑)。でもその三年でなにかを創造する能力、デザインする能力を身につけることができた。三年半後クリエイティブディレクターという肩書きをもらったのだけど、一度専門学校で学んでみたくてNYのSVA (School of Visual Arts) っていう美術学校の大学院で学ぶためには、まず学部で学士をとらなければいけなかったため、留学したんだ。ところが通つてみたら、授業内容が僕が今まで独学で学んできたことだった。だから、半年で学士を卒業し、大学院への進学は返上して働きはじめてんだ。

一九九八年頃、僕はフリーランスでの活動とデザイン事務所での勤務を両立して過ごしていた。そのころGoogleは生まれたばかり。検索といえばYahoo!の六千人の「サーチャー」が手作業ですべてのサイトの仕分けをしていたのが主流で、デザイナーのウェブサイトなんか誰も到達できなかった。

そんな時代だったから、フリーのデザイナーの仕事は人からの紹介のみ。そこで、「もつとクリエイティブ

が流通するプラットフォームをつくりたい」って考えはじめた。それがloftwork.comっていう、クリエイターのネットワークをつくるサービスであり、株式会社ロフトワークのはじまりとなるサービスをつくつたんだ。

——今ほどのようなことをやっていくのでしょか。

もともとloftwork.comはオンラインで完結するクラウドソーシングのよいうなサービスを考えていた。でも技術も概念も不足していたし、企業とクリエイターもうまく意思疎通ができない。じゃあ共通言語はなんだろう？

って考えた結果、それがプロジェクトマネジメントだった。当時の世界で、クリエイティブの世界にプロジェクトマネジメントを取り入れはじめたのは先進的なことだったはず。それは僕らが「クリエイティブの流通」を目的とし、社内クリエイターを取り入れなかつたから頑張れたことだと思う。数年でプロジェクトマネジメントを習得したディレクターが数十人のクリエイターとオンラインで協調作業をする制作構造は、当時ではかなり先進的だったんだ。

今のloftwork.comは、それが発展して企業の新製品や新サービスの開発など、イノベーションをサポートするクリエイティブエージェンシーになつてきている。その他にも、クリエイティブクラスターの学びの場であるOpenCUを二〇〇九年につくつて、アートディレクターや建築家たちともネットワークが生まれ、クリエイティブの領域が高度化していったんだ。

三年前に生まれたFabCafeは台北、バルセロナ、バンコク、シッチェスに広がりNY、SF、シンガポールに計画している。今まで掲げてきた「クリエイティブのコミュニティと一緒に何を生み出せるか」や、「クリエイティブの流通」といったテーマをグローバル社会でどう活かせるかが、今のチャレンジかな。

——進路に悩んでいるSFC生に一言お願いします。

人気企業ランキングを見ることは人気アイドルに告白していくようなもので、過競争すぎて見合わないんじゃないかな。僕はそこで勝てる自信はない(笑)。

それより「おもしろそう」「頑張

れそう」「合いそう」っていうセンスの方が確かだと思う。恋愛と同じ。マッチングサービスに頼つて条件を考える人と、好きかもつていう気持ちに情熱をもてる人。どっちの方が素敵で幸せになれるか、っていうと後者じゃない？

起業もありだと思う。頑張らざるを得ないから。つぶれちゃうかもしれないけど経験は活きるし、みんなが思っているより社会はそのチャレンジを高く評価するよ。

大切なのは頑張れる環境にいることじゃないかな。逆に「余裕の職場」は長い目でみればブラック企業よりずっと危険な職場だと思う。

もう一つ大切なのは、外に出てみることだと思う。今はいろんな学ぶ場やイベントやハッカソンもある。そのような場に参加してみれば、何をしているときにわくわくして、どんな作業に没頭できるのか見えてくるよ。将来伸びる業界や会社はどこだろうっていうほぼ外れる憶測より、「今こんなこと頑張つて、大変だけど楽しい」って恋人にキラキラ話せれば十分だと思う。その先に自信をもって「プロフェッショナル」といえる楽しさがあるよ。

～学内の就職・進路支援を活用しよう～ 就職・進路支援担当オフィス

—就職・進路支援担当（CDPオフィス）ではどのような側面からSFC生をサポートしているのですか。

CDPオフィスでは、学生の就職や進路に関するサポートのみならず、学内外での研究活動に対する助成やフィールドワーク科目の申請、インターンシップ情報の提供、学校推薦制度、就職課程の各種手続きなどを行っています。

就職進路支援という面では、学生の主体的な活動を大前提としながらも、学生自ら選択し、決定していくために必要な情報を提供し、側面からサポートするというスタンスで、個別相談や学内セミナーを展開しています。個別相談は、学年を問わず「いつでも・誰でも・どのような内容でも」相談に応じています。学内で開催するセミナーは、SFCや他キャンパスの卒業生をお呼びして諸先輩の仕事観・職業観を直に伺えるものから、面接やエントリーシート、筆記試験対策のような実践的なセミナーまで、多種多様なプログラムを行っています。CDPオフィスには

企業の人事担当者の来訪も多くありますので、企業の生の声もヒアリングしつつ、学内でのセミナーや個別相談に反映しています。

また、CDPオフィスには、企業の求人情報や、いわゆる「OB・OG訪問」用の情報検索端末などがあり、就職活動対象学年の学生はいつでも利用することができます。

—実際に訪れるSFC生はどのような質問や相談をしているのですか。

CDPオフィスでは年間三万件前後の個別相談を受けています。利用している学年も多様ですが、他キャンパスの学生の利用も数十件あります。就職活動を進めている学生からの相談が大半です。その内容は、就職活動の進め方や自己分析・業界研究・企業研究の方法など就職活動全般に関することから、エントリーシートの講評、個別の模擬面接など実際の選考試験に即した相談まで、さまざまです。また、希望者には模擬面接の様子をビデオ録画していますので、ご自身で振り返ることができます。エント

リーシートや模擬面接は回を重ねるごとにブラッシュアップされていくものですので、本番に向けての練習を兼ねて何度も利用される方が多いです。

—SFC生の全体的な進路の傾向や方向性はどのようなものですか。

業種別に見ると、総合政策学部・環境情報学部ともに、インターネットサービスや放送業、出版業などの「情報通信業」、広告やコンサルティング業などの「サービス業」、電気・情報通信機器メーカーや食品、自動車などの「製造業」、これらの三業種で全体の六割弱を占めており、大学院の政策・メディア研究科においては、この三業種の割合が八割弱に伸びています。

企業別に見ても、知名度の高い企業への就職が目立っており、マスコミや広告業界への根強い人気も、ここ数年変わらない傾向です。SFCと他学部で大きく違うところは、旧来の大企業ばかりではなく、外資系の企業や近年急成長している企業への就職が比較的多いという点です。他学部では景気の良し悪しに関わら

ず、常に例年同様の企業が上位就職先企業になっていますが、SFCではその年毎に、勢いのある企業も就職先上位にあがってきています。

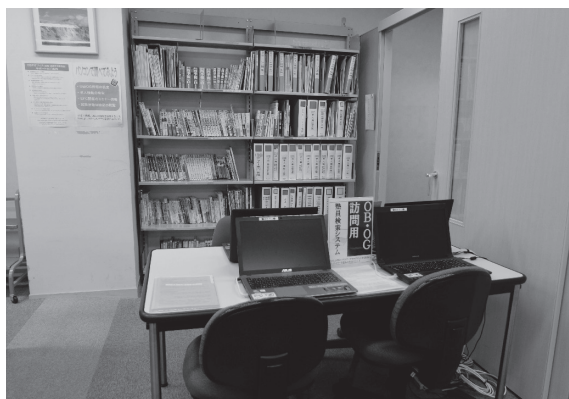
こうした傾向と関連して、企業から評価されているSFC生の強みとして、「問題発見・解決型」の人材であることが挙げられます。既成概念にとらわれず、新たな価値を創出し、組織に斬新な考え方を吹き込むことが望まれていると感じます。

——CDPオフィスに勤めている方々は、どのようなノウハウや経験を積んだ方々なのでしょう。

CDPオフィスに限らず、慶應の就職・進路担当職員の中には企業勤務経験のある者や、キャリアカウンセラー資格を持つ者など、個人のバックグラウンドはさまざまです。就職・進路担当はその業務の性格上、学外での研鑽の場も多く、他大学との勉強会や企業との情報交換会、セミナーなどにも積極的に参加しており、日々、リアルタイムの就職・採用環境を把握するように努めています。



CDP オフィスの様子。職員に話しかけられるカウンターもあり、気軽に足を運べる雰囲気だ。



このパソコンでいろいろな情報を検索することができる。後ろには就職活動に役立つような本がずらりと並んでいる。



個別相談ができるブース。落ち着いて相談できる空間だ。



「失敗伝説」プロジェクト

SFCの新たなキャンパスとして現在構想中の未来創造塾。しかし、未来創造塾についての情報はまだまだ少なく、現役生からも卒業生からも認知されていないのが現状だ。今回はSFCの卒業生である面白法人カヤックの柳澤大輔氏と坂口淳一氏に、SFCの村林裕総合政策学部教授とともに立ち上げた寄付金についての企画「失敗伝説」についてインタビューをし卒業生がどのように未来創造塾に関わるかといったことについて話を聞いた。



失敗伝説の web サイト

——失敗伝説とはどのような企画ですか。

今回の「失敗伝説」企画の音頭をとっているのは僕ら面白法人カヤック株式会社（以下カヤック）にいるSFC卒業生なのですが、あくまで卒業生の有志ということで、カヤックという会社の企画ではないのです。この企画の狙いは、SFCの卒業生全員ひいては、慶應のOB・OGを母校への寄付に巻き込んでいくことです。

現在慶應義塾大学が、未来創造塾という新しい慶應の宿泊型施設の、建設への寄付金を卒業生に募っています。慶應には寄付をするという文化があつて、それによって大学のいろいろなことが成り立っています。それで今回も卒業生に対して、未来創造塾のために寄付をしてもらえないかというお話で、カヤックにも慶應義塾大学総合政策学部の村林裕教授がおいでもりました。普通に寄付をするという形でも良かったのですが、ただの寄付だとおもしろくない。せっかく面白法人にお話を持つ

てきていただいたので、カヤックに
いる約二十名のSFC卒業生たちと
どんな形の寄付が良いかを考えたん
ですよ。いろんな案が出されました
が、一番シンプルで実現できそうな
企画というのを考えた結果、卒業生
が一口一百万円の寄付をすると、SFC
の食堂で利用されているトレイ
に、何か貼れることにしたらどうか
というアイデアがでてきました。で
もただの広告だとおもしろくないか
ら、おもしろくて参考にできる読み
物がいいよね、という話になりました。
ここからは現役の学生さんたち
とも話し合った結果、卒業生の失敗
談を載せるのがおもしろいのではな
いかという話になりました。最終的
に、自分の失敗談を一口一百万円で
シール、二百万円で二シールをトレイ
に貼ってもらえるという企画になり
ました。先輩の失敗談を学生に読ん
でもらい、学生たちの将来の参考に
してもらおうと同時に、自分たちの名
前もトレイと一緒に載って話題にし
てもらえるということです。そして
今「失敗伝説」のサイトを立ち上げ
ていて、寄付金と一緒に卒業生の失

敗談を四百字前後で募集していま
す。食堂のトレイ約千枚分を目標に、
二月二十日まで失敗談を募集してい
ます。(一月七日取材実施)

これを実現するには紆余曲折があ
りました。第一に、このような寄付
の形は慶應の今までの歴史にはない
わけですよ。だからこの企画を実行
するにあたって、村林さんも学内の
方々を説得するのに苦労されたと思
います。

卒業生の寄付金は年々減少してい
ます。いろんな要因があるのでしょ
うけど、一つには、自分たちが先輩
の寄付のおかげで大学生活を送るこ
とができたのだから、今度は自分が
大学の後輩のために寄付をしようと
いう「受けた恩を返す」といったよ
うな慣例が以前はあったのですが、
しかし、今はそれが少し薄くなって
いる気がするんですよ。寄付金が
集まりにくくなる中で、新しい寄付
の形が必要なのではないかという卒
業生としての思いがあって、このよ
うな企画を実現させました。この企
画はSFCの卒業生に限らず、慶應
の他学部の卒業生でまだ寄付をした

ことがない人たちにも参加してもら
いたいと思っています。食堂のトレ
イを利用するので多くの学生に見て
もらえますよね。そうすれば先輩の
寄付金が未来創造塾の新しい施設の
ために使われることを知ることがで
きます。慶應大学って寄付の文化で
成り立っているんだなということ
を学生のうちから理解してもらえ
るといいなと思っています。

SFCは創立当初から慶應らしく
ないと言われてきました。しかし、
福澤諭吉先生の本を読むと、実は新
たな開拓こそが慶應の精神なんです
よね。なので慶應らしくないと言わ
れているSFCが実は一番慶應らし
いのかもしいなと。今回の企画
も新たなチャレンジです。ぜひ参加
ください。匿名でもいいし、何なら
失敗じゃなくても良いです。今年だ
けじゃなく来年も継続したい。「失
敗」ではなく別のテーマでも良いで
すし、今後は学生を中心に運営して
いけたらよいと思います。
編集部記・四月一日から食堂で毎日
異なる「失敗」を読むことが楽しみ
になります。



(左) 柳澤さん、(右) 坂口さん

柳澤 大輔 (やなさわ・だいすけ)

1996年環境情報学部卒業

面白法人カヤック代表 CEO

坂口 淳一 (さかぐち・じゅんいち)

2010年総合政策学部卒業

面白法人カヤック 企画部

おとなりの研究会

さまざまな学問分野を学べるSFCで、研究会（ゼミ）はカリキュラムの中心だ。学生は授業で幅広く諸学問に触れ、そして研究会ではひとつのテーマを掘り下げる。当然、学生にとって研究会選びは自分の方向性の選択に他ならず、非常に重要だ。このコーナーでは、数多いSFCの研究会のうちから二つを取り上げ、各担当教員にどんな狙いを持って研究会を運営しているのかを聞いた。



三次 仁 (みつぎ・じん)

環境情報学部准教授
専門は無線通信、無線応用、計算工学

——三次研究会のテーマについて教えてください。

研究会の主なテーマは無線を使ったインターネットについてです。学生は全員で十五人います。その上で、今学期扱っているテーマは、在宅療養における服薬の管理、物流システムや農産物の流通システムのIT化、物の効率的な管理、などです。はじめは看護を専攻している留学生が在宅医療を広めたいということ、市販の薬箱にセンサーをつけた簡単なデジタル薬箱を開発しました。この薬箱から薬をとると、そのことがワイヤレスで訪問看護ステーションなどに通知されます。患者さんが服薬を忘れていたら、デジタルフォトフレームを使って患者さんに、「薬を飲み忘れていませんか？」などのメッセージを送ります。そうすると飲み忘れを減らせるという仕組みです。この開発がベースとなつて、最近では研究会の学生と厚生労働省の研究所が共同で、うつ病患者が薬を飲み忘れるのを減らすための研究をしています。特にうつ病の患

者は薬を飲まなければ自殺してしまうことがある。そのため、医師は自殺を防ぐために複数の薬を処方しています。うつ病患者に退院後も自宅ですべて忘れず薬を飲んでもらうべく、これまでにカレンジャー式の服薬管理を開発しました。

農産物のIT化では、静岡県のある市と研究会の学生たちが共同で研究しています。農産物のIT化というところ、ビニールハウスの中で農作物に自動で水を与える装置をつくることなどを想像すると思うんですが、僕らがやっているのはそうではなく、「流通」についてなんです。たとえばおいしいメロンをつくる農家の人がインターネット上でお店をはじめたとします。そこで、メロンだけではなくメロンとイチゴを詰め合わせでほしいという人がいるとすれば、メロン農家のサイトに行つて注文し、さらにイチゴ農家のサイトに行つて、別々に注文しなくてはなりません。それだけでなく、送料も二倍になってしまふ。そこで、ある地域の農産物一つのサイト内で販売するという仕組みをつくつたんで

す。お客さんがその地域の農産物販売店のサイトに行くといチゴもメロンもまとめて買える。お客さんが品物を注文すると、各農家に発注が入り、商品を箱に入れて、「いつまでに集積所を持ってきてください」という指示が出る。集積所ではイチゴとメロンを一つの箱に入れて梱包されます。お客さんの立場からすると商品のバラエティが増え、送料も安くなるというわけです。

また、静岡では南海トラフ地震による災害への対策が積極的に進められています。静岡県の袋井市と複数の企業とうちの研究会が共同で災害時の救援物資運搬システムを開発しました。物がどこにあつてどういう状態なのかという物流の面から考えると、農作物でも災害の備蓄品でもシステムは基本的に同じです。なので両者の物流に共通の情報システムを用います。普段はそのシステムを農作物の電子商取引として使い、災害時には災害救援物資の供給システムとして使います。しかしそのシステムを普段から使っていないと、いざ災害が起こったときにうまく機能

しないのです。普段はその情報システムを農業用に使っておいて、いざとなつたらそのシステムを救援物資の供給用として利用すれば、スムーズにシステムを動かすことができます。

——三次研究会に入りたいと考えている学生にメッセージをお願いします。

学生に求めるのは、「技術が好きであること」、「英語に抵抗がないこと」の二点だけです。技術が好きであること」というのはもちろんですが、「英語に抵抗がないこと」というのは、この分野では英語を使うことが当たり前だから、そして日中韓三方国の Auto-ID Lab の行事で年に二回行われる交流会にて英語が必要になるからです。Auto-ID Lab は世界七カ国の大学に拠点があり、最先端の自動認識技術の研究開発を進めている機関です。英語での論文の読み書きに加え、この交流会で論文を発表する際に英語が必要です。しかし、中国と韓国の学生も英

語はそんなに得意ではないので心配いりません(笑)。

僕が学生だったときは大型計算機の時代で、今のようなコンパクトで高機能なパソコンなんてなかったんです。一人では物やサービスを動かすことがほとんどできなくて、工場に頼まないといけなかった。だけど今は、やろうと思えば自分で回路をつくって、さらにサービスまで設計することができる。こんなに楽しいことはないと思います。サービスの設計をして、そのサービスのモデルを不細工でもいいからつくってみる。私の研究会ではまずそこを目指しています。

今特にやりたいのは、新しい価値を創造するというより、損をしていくところや効率の悪いところをITの力で解決したり、改善したりすることです。システムのクオリティは企業より低いかもしれないけど、つくる速さは大学が一番です。企業で開発するとなると、そのシステムを商売にしないといけないので、売れないものをつくらないうです。しかもシステムのすべてをつくるという

うことがほとんどないんです。部品のメーカーは部品しかつくらないし、ソフトのメーカーはソフトしかつくらない。じゃあ、誰がハード、ソフト、そしてUX(ユーザーエクスペリエンス)の要請に応えるもの、この三つの要素をまとめたものを出していくのか。それは大学にしかできません。そういうことがやりたい人にぜひ私の研究会に来てほしいなと思います。



19 今井むつみ研究会

今井 むつみ

(いまい・むつみ)

環境情報学部教授

専門は認知科学（特に認知言語発達科学、言語心理学）

——研究会のテーマを教えてください。

春学期と秋学期を通じて一貫したテーマで、認知科学を幅広く扱っています。認知科学は、人がどのように学習や判断をしていくか、また人はどのようにして物事を記憶するのかということを考える領域なので、かなり幅広いですね。私自身は、主に子どもの言語の発達や、大人の外国語の学習の認知プロセスを研究しています。基本的に言語について扱っているのも、もともとそのようなことに興味を持っていた学生がこの研究会に入るというケースが多いです。しかし、そのような学生だけでなく、人がどうやって意思決定や判断をするのかということや、言語以外の領域での子どもの発達に興味を持っている学生もいます。他に、言語学習の延長として、教育について興味をもっている学生もいて、研究会に入ってくる学生の関心はさまざまです。

——具体的にどんな活動ですか。

私たちの研究会では週二回の定例セミナーを行っています。そのうちの一回は、みんなで英文の文献を読んで、学生が輪読発表を行います。みんなで認知科学についての共通の理解を深め、ディスカッションをします。もう一回のセミナーでは、その週の担当学生に自分で選んだテーマについての論文を事前に読んでもらい、発表してもらいます。

授業としての研究会はこのような感じですが、授業外ではサブゼミを開いています。サブゼミでは、研究を進めていく上で必要である基礎的なスキルを学びます。たとえば、統計を扱いますね。認知科学の研究は、基本的には実験がベースとなるのですが、その実験を行う上で知っておかなければならない知識がたくさんあります。なので、サブゼミでそのような基本的な知識を学んでもらいます。このように、研究会の授業では最新の論文を読み、サブゼミとして実験を行う上での基本的な知識を学びます。

また、実際に実験を行ってデータの取り方や、実験の仕方を学びます。

この活動の対象者は半分くらいが大學生などの大人で、残りの半分は保育園に通う幼児です。実際に保育園に出向き、幼児の行動を対象にした実験データを集め、大人の行動と比較しています。データを集めているのは卒業論文を作成する上級生で、下級生はお手伝いをするという感じですね。そのほかに、一学期に二回程度、学外での教育に関わるアウトリーチ活動を行っています。

——研究会を進めていく上での、先生のモットーを教えてください。

研究会の学生には真剣に学んでほしいですね。また、仲良く、チームワークよく行うことが大事だと思っています。いい雰囲気で、みんなが楽しく学ぶことができるように、というのが私のモットーですね。実際、私がそのことに対して特別な配慮をしているというよりは、学生がそれぞれ考えて、場の雰囲気をつくってくれていますね。研究会のメンバー

はみな、勉強に対しても熱心であるし、お互いが協力しています。上級生が下級生にいろいろ教えるということもよくありますが、上級生も下級生もフラットな関係で、わりと友達のような感覚で付き合っているようです。私たちの研究会では英語の論文を扱うので、初めてこの研究会に入った学生は、学期はじめの時期はかなり大変だと思います。でも、私が見てないところで、そのような学生を上級生や他の学生が助けているようです。なので、学期はじめは英語論文を理解することがやつとのような学生でも、二学期目に入るときには、読む力が相当ついていますよ。

——先生の研究会の学生は、具体的にどのようなテーマの研究をしているのですか。

先にも言ったように、みんなそれぞれの興味や関心に従って研究しているのですが、とても幅広いですね。ただ、研究テーマは多様なのですが、一つ共通することは、人間の知性と

はどういうもので、また、どのように発達して、どういうふうに学習していくのか、ということですね。あの学生は、デジタル機器を用いた学習がどれだけ効果的なのかということとを研究していました。たとえばノートパソコンでとつたときと紙でとつたときでは、どちらが内容の理解や理解したことへの記憶の定着の仕方がよいのか。他に、中国語の特有な漢字などのような知らない文字を覚えるのに、タブレットを用いたときと紙と鉛筆を用いたときではどのように違いが生じるのかなどです。

卒業論文に関しては、一年間というとても短い時間ですが、自分が興味のあることをテーマに選び、仮説をたて、実験を行い、分析をします。実験だけでもかなり時間を要するので、自分がまとめられる範囲での研究となりますが、学部生でも大学院生や大学の教授などが学術誌などに出すくらいレベルの研究をしています。はじめは先輩の実験のお手伝いをしながら、実験のノウハウや子どもへの接し方を覚えます。子ども

のデータをとるのって、簡単ではないんですよ。三歳児でもすぐく大人の態度に敏感で、下手に接するとデータはとれません。なので、なるべく向いて、一緒に遊んで、向こうに「学生に来てほしい」と思わせる。また、実験自体がつまらないと幼児がやってくれないので、実験自体にも興味を持ってもらうように工夫する。そういうやり方は、自分で見つけていくしか術はありません。今までに、実験当初にとつたデータが使い物にならなかったケースもあります。しかし、その実験によって、子どもへの接し方や自分の実験の仕方、次の実験へと準備を再度仕切り直し、結果的にいいデータをとれるのです。私たちの実験の対象は、人間です。なので、実験に取り組むながら、どういうふうに人へ接すると被験者の人が一番よい能力を発揮できるのか、工夫を凝らします。人への接し方を学ぶということは、ある意味、よい研究結果を出すということより重要なのではないのでしょうか。

——学生に一言お願いします。

認知科学という学問は、人を理解するという点で大事なことをたくさん教えてくれます。人は「自分のことを十分に知っている」と思いがちだけど、実は「人がどうしてこういうことができるのか」ということは、宇宙の起源がなにかで、同じくらい深いことで、あまりよくわかっていないんですね。そういう、人間の知性について考えを深めることは、認知科学の研究者だけでなく、どんな進路に進もうとも、役に立つと思います。でも、それは座学ではなかなか学べないと思います。やっぱり、自分で試行錯誤しながら、プロセスを学んだときに実現できるんじゃないでしょうか。なのでぜひ、座学ではなかなか身に付くことのない、自分の体を使った学びというものを経験してもらいたいですね。

sfcism

vol.06

SFCの卒業生や現役の学生のなかには、知る人ぞ知る人がいる。
このコーナーでは、ユニークな活動をしている卒業生や学生を特集する。
今回は、博士課程在学中の2007年にスパイバー株式会社を設立し、
取締役社長である関山和秀さんにお話をうかがった。



関山 和秀

(せきやま・かずひで)

2005年環境情報学部卒業生
2007年政策・メディア研究科修士課程修了
2007年にスパイバー株式会社代表取締役社長に就任（現在は代表執行役）

——「スパイバー」というのはおもしろいネーミングですね、どのような会社なのですか。

スパイバーは研究開発型のベンチャー企業です。鋼鉄より強靱で脱石油の次世代素材として期待されているクモの糸を実用化するための研究開発に取り組んでいます。また、クモの糸はタンパク質でできています。そのタンパク質を人類が素材として使いこなせるようにするための基盤技術の開発も進めています。

タンパク質は二十種類のアミノ酸からできているんですが、そのたった二十種類のアミノ酸の並び方の違いによって、クモの糸やシルク、髪の毛、爪、皮膚、ホルモン、唾液や胃液などに含まれる消化酵素、抗体など、性質や機能の全く異なるさまざまな物質がつくられています。これって本当にすごいことですよ。生物はタンパク質を基幹材料として採用したので、進化という超イノベーター的な能力を獲得しました。生物は無

数のタンパク質を素材として使いこなしているわけですが、その設計図はすべて遺伝子、つまりDNAに書き込まれています。DNAに変異が起ると、それによってタンパク質の設計図が書き換わり、でき上がる素材が変化します。激変する地球環境に合わせて自分自身を構成する素材・材料をどんどん変化させていくことで、三十八億年ものあいだ絶滅せずに生き延びてきたわけです。まさに生命の神秘です。

このように、生物としてはタンパク質をうまく使いこなせているのに、人類はこの画期的な素材を産業的に使いこなせていません。原料を石油に依存せず、ひとつのプロセスで無数の素材ができてしまう、こんな素晴らしい素材のプラットフォームは他にありません。何十年後になるかわかりませんが、タンパク質が鉄やガラスといった、産業的になくてはならない基幹素材となる時代が必ず来ます。

今後、九十億人を突破すると言

われる世界の人口を支えるためには、地球三個分の資源が必要と言われています。発展途上国はこれから発展していこう、生活を豊かにしようと思えるわけですが、このままだと資源は必ず枯渇してしまいます。これは人類にとつて重大な問題です。限られた資源をめぐって必ず戦争が起るわけですよ。日本も今すぐには巻き込まれないかもしれないですけど、私たちの子ども世代、孫の世代はどうなっているかわかりません。スパイバーはこの人類規模の課題に対してテクノロジで挑もうとしているわけです。

——すごいですね、成功したら人類へのとてつもない貢献ですよ。その話をもっと伺いたいところなのですけれど、もう一つ、街づくりのプロジェクトにも関わっていらつしやると伺いましたが？

スパイバーの本拠地は山形県鶴岡市で、私もそこに住んでいます。

昨年(二〇一四)八月、スパイバー

のメンバーを中心に、地元の人たちと一緒にYAMAGATA DESIGNという会社を立ち上げました。これは都市開発事業を手がけるベンチャー企業で、慶應義塾大学先端生命科学研究所が拠点を置く鶴岡サイエンスパークを中核としたまちづくりを進めています。こちらの会社はテクノロジで社会問題を解決していくというより、考え方や社会システムを変えていくことで課題解決に挑もうとしています。

このプロジェクトをはじめ大きなモチベーションとなったのが、地域の子育てや教育の環境をよりよくしたいという思いです。スパイバーには日本各地、最近では海外からもメンバーが集まってきています。その大半は二十代から三十代の子育て世代です。私たちにとつて、そしてこれから加わる将来のメンバーにとつても、子育てや教育の環境はとても大切なことです。でも今の鶴岡市における環境は、必ずしも自分たちにとつて理想的とは言えません。そこで

本当にいいと思える理想の子育て環境、教育環境を実現したいと思い、地元教育委員会の方々をはじめ、地域の大勢の方々との協力しながら、すごいプログラムをつくらうと動きはじめました。しかし、本当にいい教育プログラムを実現するにはそれ相応のコストがかかる。理想のプログラムができて、お金持ちの子どもしか利用できないものになってしまったら、格差を助長することにつながってしまい、それはそれで自分たちが目指しているものではない。そこで、たとえば収益性の高い不動産事業を並行して行い、そちらの利益を教育事業に回せば、誰もが利用できるコストでものすごくクオリティの高い教育環境を実現できるんじゃないかと考えたわけです。ようするに、最高のクオリティの社会インフラを極力安いコストで実現できるシステムを、民間でつくれるのではなからうかというわけです。

やったほうが変な制約もないのでスピードも速いし、クオリティも高まり、実験的な取り組みも可能です。ここで重要なことは、この事業の開発や運営に直接的に関わる地元企業や、実際にサービスを提供する地域の方々にこの会社の株主になっていただくということ。そうすることで、独立では不採算になってしまうような教育事業などの公益的な事業にギリギリ黒字かトントンになるまで利益を回しても、実際の開発や運営の過程で生み出される仕事や、その事業がもたらすサービスなどを通じて、株主利益を十分に満足させることができるんです。まさに、地域の地域による地域のための開発、これこそ真の地方創生モデルだと思います。他にもいろいろなモチベーションがあり、さまざまなプログラムを計画していますが、こういった取り組みによって地域の社会環境の質、都市としての価値がどんどん向上し、活性化の好循環が生まれていきます。仕事を生み出し、雇用を生み出し、世の中に価値を

生み出すエンジンとなる新産業創生を進めるスパイバーとの両輪で、世の中って本来こうあるべきなんじゃないかという全体最適を考えた理想の社会システムが実現可能であることを証明していきたいですね。

——関山さんの場合、起業のきっかけは何だったのですか。

高校生の頃から自分で何か事業をやりたいと思っていました。家族を含めて周りに事業家的なマインドを持っている人が多かったからかもしれません。高校のクラスメイトとは、どのような事業をやるうかという話をよくしていました。ちなみにそのクラスメイトの一人とスパイバーの構想を話し合い、結局彼は会計士をやめて一緒に起業することになりました。

もともとそんな思考回路であるため、私は今も研究を手段としか思っていない。研究のための研究には興味がないんです。確かに研究はおもしろいですが、研究すること自体が目的ではなく、研究

した成果が実用化されたりして世の中にポジティブなインパクトを与えて初めて意味があると思っています。だから世の中にポジティブで巨大なインパクトを与えられる研究テーマであれば、どんなテーマでもいい。ただ、すでに誰かが研究していることの真似をしても意味がない。だからまだ誰もやってないこと、できないことにチャレンジすることに意味があると、思っています。とはいっても、実際自分たちが何をすべきかという選択はすごく難しい。自分が世の中に対して最も貢献できる手段は何か、貢献するためには何をすべきなのか、という視点はすごく大事だと思えます。貢献の仕方はいっぱいあるし、何でも貢献になると思いますが、同じ時間と労力を費やすなら、「1」の貢献より「10」の貢献ができることを選んだほうがいいですよ。その人の能力をより効果的に人類のために活かせているわけですから。私たちもいろいろ試行錯誤をしてみても、その中で生き残ったのが今やって

いる事業なんです。今これをやる
ことが、自分たちが一番世の中の
役に立てることだなと思って、ク
モの糸の開発や都市開発をやっ
ています。これからも考え続け、さ
らに自分たちのできることを増や
していきたいですし、場合によつ
てはテーマを変えることも必要に
なるかもしれません。とにかく、
その時々最大限人類社会に貢献
できることをやっていこうという
姿勢が大事だと思っています。

——学部生時代、富田勝環境情報
学部教授の研究会にいらしたんで
すよね。そこに入ろうと思ったの
はなぜですか。

私は慶應義塾高校で文系クラス
だったので、大学で理系の学部
に進むという選択肢はありません
でした。その頃は漠然と、将来は人
類規模の課題を解決するような大
きな事業をしたいと思っていまし
た。たまたま慶應内部生向けのS
FC説明会に行ったときに、説明
会担当の富田教授が、SFCでやっ

ているバイオテクノロジーについ
てすごく熱く語っていました。S
FCは地球規模の課題を解決して
いくようなことをやっている学部
で、バイオテクノロジーはまさに
エネルギー、食糧、環境などの地
球規模や人類規模の問題を解決し
ていくキーテクノロジーになると。
それを聞いた私は、「とにかくこの
アツい教授のところに弟子入りし
たい!」と思って、説明会が終わっ
た後すぐ富田教授のところに行
って話をしました。そしてS
FCに進学し、すぐに富田教授の
研究会に入れてもらいました。

——入ってみていかがでしたか?

はじめて研究室を見学したとき、
「ここで研究をしている人たちは、
みんな天才なんだろうな」と思い
ました。細胞シミュレーションを
やっていたり、わけわかんない数
式や物質名がたくさん飛び交って
いたので。英語の論文とかも何が
書いてあるのかさっぱりわからな
いし、これは大変だと思いました。

でも半年ぐらい無我夢中にやって
いると、いつの間にか専門用語も
わかってくるし、英語の論文も読
めるようになってきて、意外とやっ
ていることは大したことないんだ
な、と思えるようになりました。
研究者って、学術用語をたくさん
使いますし、さも難しいことを研
究しているかのように得意になっ
て語ることが多いですが、実際に
やっていることは意外と地味で、

なんだそんなことか、というよう
なことばかりです。私たちの研究
も、さあどうやってクモの糸を入
工的につくろうか、というところ
からはじめて、今や量産化を実現
する一歩手前までできているわけ
ですが、はたから見ると、よっぽど
すごい人たちがすごい技術を開発
しているように見えると思います。

でも毎日やっていることは意外と
普通で誰にでもできることなん
です。ただそれを十年も続けている
と、そのひとつひとつの過程を知
らない人から見れば、ものすごい
ことのように見えてしまう。なの
で、それなりの気合と根性さえあ

れば、誰にでもすごい研究ができ
るんです。ある日突然、人類の常
識を覆すような技術が生まれるこ
とはありえないんですよ。壮大な
テーマを掲げたら、あとはとにかく
やってみて失敗して少しずつ学
んで、小さな工夫やアイデアを積
み重ねていくことが、研究を進め
る上で一番の近道なんです。

——最後に学生に向けてメッセージ
をお願ひします。

人生は本当に短いですし、やれ
ることも時間も限られています。
手段が目的化することは最悪なの
で、なんでも本質的に突き詰めて
考えることが重要だと思います。
何故この研究をするのか。何故仕
事をするのか。何故会社を起こす
のか。幸せとは何か。何故生きる
のか。正解のない問題だからこそ、
できるだけ早いうちに考え抜き、
自分はどういう生き方がしたいの
か答えを出し、実際に行動を起こ
す。それが一番大事だと思います。

When I was young

学生にとって、教員はどこか遠い存在である。

しかし、そんな教員にも学生だった時代がある。一体どのような学生生活を送り、

それは、その後の人生にどのような影響を与えたのだろうか。

今回は、看護医療学部で教鞭を執っているトーマス・ハーディ准教授に若かりし頃を振り返ってもらった。



Thomas Hardy

——先生の経歴を教えてください。

When I was young

一九五二年にアメリカのユタ州で生まれ、育ちました。大学はユタ大学に進学し、その後サンディエゴ州立大学で文化人類学の修士の学位を取得しました。取得した後にはじめて日本を訪れたのですが、ビザを取得したわけではなく、ワーキングホリデーのような形態で、ホテルや会社勤めのビジネスマンに二年ほど英語を教えていました。それからアメリカに帰国し、ニューヨークにあるニュースクール大学でソーシャルリサーチを学び、再び日本に戻りました。日本では早稲田大学の近くに住み、そこでフィールドワークを通して、早稲田界隈のソーシャルコミュニティについての研究をしていました。普段から日本の商店街を利用したり、六畳一間の風呂なしアパートに住んでいたのも、六年間毎日銭湯にも通っていました。銭湯では、自分の背中を地域住民の人が洗ってくれたり、私も彼らの背中を洗ったりして楽しく過ごしていました。真冬の銭湯はあつたかくて最高ですよ

ね。その後、再びアメリカに帰国し、日本で行ったフィールドワークをもとに博士論文を書きました。博士号をとった後、日本に戻り、玉川大学で十年間英語を教えていました。文学部の学生が対象だったので、比較文化的な内容にも触れていました。この間、幸いなことに高校の教科書をつくる機会に恵まれて、「New Crown」という英語の教科書の編集に携わりました。このとき、三省堂の方と一緒に仕事をするのがとてもおもしろかったですね。優秀な記者や編集者の方々の協力のおかげで、英語の知識のみならず文化の多様性など、いろいろなことを織り込むことができました。なので他の教科書に比べ、内容は少し難しめとなりましたね。その教科書は十八年間程使われていたようです。その後、慶應義塾大学の看護医療学部の教員となりました。教員になった頃は、看護や医療に関しての知識はまったくありませんでした。

今、私のクラスでやっていることは、さまざまな考え方を学ぶということです。そこに比較文化のエッセンスが含まれているのですよね。たとえばサイバー空間の問題について取り上げたり、アメリカの児童に絵本を送ったりなど、プロジェクトは多岐にわたります。その数あるプロジェクトの中で、私は比較文化の考え方を学生たちに伝えたいのです。比較文化というものは、ソトの文化、ウチの文化というように「ソト・ウチ」と区分するものと捉えられるかもしれませんが、私はそうではないと思います。ソトの文化とウチの文化を一緒のものとして捉え、自分のこととして考えることが比較文化の礎なのだと考えています。

——どんな少年時代を過ごされたのですか。

ユタ州はとてもんびりした田舎だったので、乗馬をしたり、スイミングをしたりしていました。また家から三十分圏内にスキー場があったので、冬は毎週末スキーをしていました。とてもアクティブな少年でした。一方で、読書をするのも好きでした。比較文化や人類学に興味をもったのも、小学生のときから「ナショナルジオグラフィック」を愛読していたことによるかもしれません。家族が定期購読をしていたので、私は読みふけていました。今はインターネットやさまざまなメディアがあり、世界のことを知る機会は少なくありませんが、当時はその機会も手段もほとんどありませんでした。だから、そのときに読んだナショナルジオグラフィックの美しい写真や記事が、さまざまな世界のことを知る契機を私にもたらしてくれたように思います。ナショナルジオグラフィックには自然科学に関することや社会問題についてなど多様なジャンルの記事や写真が掲載されていますよね。そのおかげで、ユタというのんびりした地域に住んでいるながらも、ブラジルやヨーロッパで起きていることや人々の考え方や生き方が、言葉の違いなど折にふれ知ることができました。このようなことから、ナショナルジオグラフィックは先ほど述べた「比較文化」という考え方に気づかせてくれた雑誌だと思っています。

高校生の休みには家族でキャンプに出かけていました。そのキャンプ地は千年以上も前にアメリカの原住民が住んでいたと言われているメサ・ヴェルデというエリアなんです。今は砂漠地帯のようなところですが、シルクロードを思い浮かべるといいと思います。そこには遺跡以外なものがないので、その風景を見て、当時の生活がどのようなものであったのかを想像するわけです。遺跡を見て、原住民の生活に想いをはせ、家族とキャンプを楽しんでいました。

幼い頃にナショナルジオグラフィックやこのようなキャンプで比較文化を体験した一方で、大学生になると読み物を通して比較文化というものをより深く考えるようになりました。チャールズ・ディケンズが書いた小説やさまざまなフィクションから比較文化を学ぶことはできませんでした。その内容は事実ではなくフィクションです。しかし、人の心情を理解するという観点で見れば、小説から学ぶことは少なくありません。世界で何が起きているのかというのと同時に、人の心情を理解す

るために想像力を働かせるということが必要だと思うのです。そのような経緯があり、大学時代は、人類学と文学の両方を学んでいました。その当時のアメリカの大学の制度では、入学当初は専攻を絞る必要はなかったのですが、大学三年生の終わりになるとどちらかに専攻を絞らなければならなかったため、最終的に私は人類学を専攻しました。

——ハーディ先生のおすすめの本を教えてください。

そうですね、二冊ほど紹介しましょう。ヒラリー・マンテルの『ウルフ・ホール』（早川書房・二〇一二年）と『罪人を召し出せ』（早川書房・二〇一三年）です。このどちらの本もトマス・クロムウェルについて書かれている小説です。トマス・クロムウェルとは十五世紀、イングランドのテューダー朝の政治家ですが、イングランドの宗教改革や政治的な革命を主導した人物なんです。とてもおもしろく良い作品です。興味がある方は読んでみてください。

——高校生や在学生在に一言お願いします。

在学生のみなさんは慶應で学ぶ、特にSFCで学ぶことができるという「特権」を持っています。そして社会の多くの人々より豊かな生活を築くことができるという可能性にも恵まれています。それは日本全体を見てもそうだし、世界全体を見てもそういうことができるでしょう。なので、この学生生活の間は賢く時間を使ってほしいですね。一所懸命に勉強してほしいし、遊びも真剣にしてほしいです。アルバイトに励むのも、何かを發明するのも結構だと思います。何か価値のある体験をしてほしいですね。そして、大学を卒業してもこの経験を思い出してほしいし、いつでも私はみなさんのお手伝いをしますよ。また、高校生のみなさんは、慶應大学あるいはSFCで学ぶ機会を得れば、あなたがたにとって素晴らしい体験をすることになると思っています。そしてさまざまな資格を得ることになると思いますよ。賢く時間を使って、多に学んでください。



Thomas Hardy
(トーマス・ハーディ)

看護医療学部准教授
専門は文化人類学

ようこそ、新任教授

毎年、SFCにはさまざまな分野の教員が着任する。

新たにSFCにやってきたのはどのような教員だろうか。

今号では、体操選手としての自己の経験をもとに、

技術の熟達化過程の研究を専門にしている水鳥寿思総合政策学部専任講師と
アメリカ政治の研究、特にアメリカの保守思想についての研究会を開いている

中山俊宏総合政策学部教授に話を聞いた。



水鳥 寿思

(みずとり・ひさし)

総合政策学部専任講師
専門はスポーツ科学

——SFCに来るまでの簡単な経歴を教えてください。

選手として、ずっと体操競技をやっていました。主な成績としては、二〇〇四年のアテネオリンピックで男子団体に出場して優勝し、二〇〇五年の世界体操競技選手権にて個人総合で銀メダルを獲得しました。二〇一二年に選手を引退し、今は、体操協会の方で男子強化本部長を務めながら、加藤貴昭環境情報学部准教授と技術の熟達化過程の研究をしています。

子どもの頃からやっていた体操を引退したとき、自分のこれまでの経験を人に伝えて役立てたいと思いました。何かでトップに立つための熟達の過程には、どの分野でも共通する部分があります。だから、自分の経験は人の役に立つのではないかと考えました。しかし、自分の経験を伝えるというのは、なかなか難しい。自分と同じ体操の選手が相手なら、感覚的な表現でも伝わるのですが、他のスポーツや、スポーツ以外の分野の

人に伝えるためにはどうしても理論的に説明する必要があります。それが、熟達化に興味を持ったきっかけですね。

現在は加藤貴昭研究会、永野智久研究会と合同で研究会を開いています。僕が教えるのは主に実践的なスポーツコーチングの方法や、選手のメンタルをいかにコントロールしていくかということです。ただ一方で、研究会では学生と共に勉強している面もあります。熟達化研究の第一人者である、K・アンダース・エリックソンの文献を読んで学生と一緒に議論をしています。まだ僕の研究者としてのキャリアは浅いものなので、教えながら教わっているという感じですね。自分の経験の理論化も加藤先生とディスカッションをしながら行っています。

——水鳥先生にとつての体操の熟達化とはどういうものでしたか？

適切に目標を設定することと、その目標実現のためにいかに努力をするかを考えること、この二つ

です。何かに取り組むとき、もちろん才能も影響するのですが、どんな目標を設定して、それをどのように達成するのか、それを考えることが重要なんです。そういう考え方は、スポーツ以外の分野にも通じるものです。

僕は才能ではなく、努力で結果を出すタイプの選手でした。あまり自分に才能があると思つたことはありません。だから上手くなりたいという気持ちが人一倍強かったです。僕は体操一家に生まれたので、体操で上達することが自分の存在意義だと思つていたんです。上手くなれば父に認めてもらえる、そう思つてつらい練習を続けていた。体操をはじめたときは、それが努力する理由でした。しかし、続けていくうちに体操自体の魅力にハマつていつて、もつと上手くなりたいと考えるようになりました。

そう思いはじめたのは、高校二年生の終わりぐらいからです。高校は地元を離れていわゆる強豪校に行つたのですが、そこで少しずつ結果が出るようになりました。

結果が出て嬉しいというのは、勝つたり、表彰されることが嬉しいというのとは、少し違いました。もちろん誰かに勝つことや表彰されることも嬉しいのですが、なによりも技が決まるようになってきたこと、これが嬉しかった。どの分野でも勝つということが目標になると思うのですが、体操で勝つということは、いろいろな技を習得して、それを本番で発表できるということです。男子の体操には六種目があり、種目それぞれにたくさんある技がある。それを一つずつ本番に向けて習得していくわけです。これが体操のおもしろさの一つです。普段の練習で、「今日はあの技ができた」とか、「今日はあの技ができるようになるための予備運動ができた」とか、そういう成長を実感できるんです。体操には勝つという結果の前の段階にもおもしろさがあつて、僕はそこにハマつていきました。

大学四年生になつた頃から、メタルトレーナーからサポートを受けはじめました。これもいい経

験でしたね。アテネオリンピックまでサポートを受けたのですが、このときに自分の頭の中の整理の仕方を勉強して、大きな目標を達成するための段階的な目標設定の方法などを学びました。もう一つメタルトレーナーの先生から教わつたのは、本番に向けたイメージトレーニングです。それから、普段の練習のときはずっと本番を意識していました。本番では練習と同じようにできるかが重要になるからです。オリンピックの予選は夢にまで見た舞台上に立てる喜びが大きくて、あまり緊張は感じませんでした。しかしいざ決勝となると、本当に大きなプレッシャーが襲つてきました。前のチームの演技が終わり、自分の順番になつたとき、自分に襷たすきが渡されたような感覚を覚えました。僕が失敗したら、ここまでつながつてきた日本の襷が途絶えてしまうんだと、そう感じてとても怖かった。逃げ出したいくらいでした。僕の種目はつり輪で、緊張した状態のまま、器具に飛びつきました。その瞬間

にふと気持ちが楽になつたんです。普段練習してきたときと同じ感覚を思い出すことができて、「いつもどおりにやればいいんだ」と思えました。そして、結果的にいい演技ができた。そのトレーニングの成果を決勝で発揮することができたんです。

この時期に学んだ目標設定の仕方やメタルトレーニングはスポーツ以外の分野でも応用できると思つていて、自分の経験を踏まえて一般化できたらいいなと考えています。

——今後も、ご自身の経験を元に熟達化をテーマに研究されるのでしょうか？

熟達化もひとつのテーマとしてあるのですが、それが最終目標ではないんです。僕の場合、突き詰めていくと、やっぱり体操にいきつくんですね。長期的には熟達化の研究をもとに、広い意味での体操の普及に努めたいと思つています。

広い意味での体操の普及というのは選手を増やすということではなく、高齢者や子どもにも体操をやってもらおうということです。彼らにいかにも興味を持って体操をやってもらえるか、どうすれば体操を楽しく効率よく習得できるかというところに興味があります。熟達化研究はそのためのアプローチというところでしょうか。たとえば熟達化の方法の一つとしてアナログを分析するというやり方があります。アナログということはある運動に関係した運動のことです。何かできない技があるとき、技をいくつかの要素に分解し、それに関係した運動を行うことで、どの要素が技を行う上で足りないかを調べています。運動の現場にいる身からすると、筋力や柔軟性などの静的な数値よりも、こういう動きの単位で分析するほうがしっくりきます。

これももちろんトップアスリートのコーチングにも使えますが、高齢者や子どもが体操に親しむ方法になります。子どもだったら、

遊びの中にアナログを取り入れれば、楽しく体操の練習ができるようになりますし、高齢者だったら、体力が落ちてきてもできる体操を調べることができます。たとえば、壁倒立や手をついた状態で横にジャンプができるから、側転はできる、というふうにな。そういう運動プログラムをつくることで、体操を普及させること、これも目標の一つです。これは社会的にも意義があると思っています。運動を広めることで、現在の医療費問題を解決したり、健康寿命を延ばしたりできる。体操の力で社会的な問題を解決できるのではないかと、そう思っています。

実は来年度以降、合同研究会からは独立する予定なんです。今は加藤先生や永野先生と一緒に学んでいるという形なのですが、来年度は別の形でやっていきたいと思っています。



中山 俊宏

(なかやま・としひろ)

総合政策学部教授

専門はアメリカ政治・外交、日米関係、国際政治

— 先生の経歴を教えてください。

学部時代は、国際政治学を勉強していました。幼い頃、父親が民間企業の駐在員だったのでアメリカに暮らす機会があったことや、高校のときに交換留学生としてアメリカで暮らした経験があったので、アメリカ人だったら他の人よりも知っているかな程度の感覚で、アメリカ政治に焦点を当てて勉強をしていました。

いよいよ就職という頃、世間はちょうどバブルの真っただ中で、まわりは次々と内定をもらっていました。そんな中、自分はこのまま就職するのではなく、アメリカの社会思想や左翼運動について勉強するために大学院に残りたいと思うようになりました。研究をしたいという確信があつたわけではありませんが、時流に抗したテーマで勉強したいという気持ちはありました。しばらくは、論文を執筆する日々が続きましたが、はたして自分が何になるのかまったくイメージできませんでした。

そういう状態ではありましたが、とりあえずは博士課程に進みました。博士課程に進むと、普通は研究者を目指すのですが、私はどうも往生際が悪く、他にもいろいろなことを試してみたいという気持ちが強くなりました。そこで、たまたま紹介してもらったアメリカの新聞社のワシントンポストの極東総局―事実上の東京支局ですが、

当時はそう呼んでいました―で記者として働くことになりました。日本の新聞社だと記者としての基礎的な訓練をきちんと受けますが、

とにかく人手が足りないのです、完全にオン・ザ・ジョブ・トレーニングで、最初の一年半くらいは走りまわっていました。すごく楽しく、勉強にもなったのですが、次から次へトピックを追っかけていくよりも、もうちょっと腰を落ち着けて一つのことにはフォーカスしたいと思うようになりました。やはり研究の道かなと。

ところが、不安要素もありました。博士課程には来てみたものの、私の所属していた学部は比較的新

しく、まだ誰も博士号をとっていませんでした。さらに当時は今ほど博士号をとる道筋が確立していない時代です。博士課程に所属しながらも、博士号はとれないだろうなどはじめから半ば諦めていたようなところがありました。先生たちの多くも博士号を持っていなかったのです。

そうこうしているうちに、突然、外務省の専門調査員としてニューヨークの国連代表部へ行くことになりました。そして話が出てから

ひと月もしないうちにニューヨークにいました。自分の意志というよりも、気がついたら風景が変わっていたという感じです。着任して間もなく、「日本代表」の席に座っている自分にびっくりしたのを今でも覚えています。包括的核実験禁止条約（CTBT）の交渉に係る会合でした。本来は、研究者の卵として現場のお手伝いをしてながら勉強するというのが本務のはずでしたが、実態はそれほど遠く、走り回って、足腰で仕事をするとこの状態が続きま

した。日本が安全保障理事会に非常任理事国として入っていた時期でしたし、安保理改革の機運が高まっていたので、それはもう忙しかつたです。さて任期を終えて、どうしようかと考えていたところ、これもいろいろなめぐり合わせで外務省に近い日本国際研究所というシンクタンクに勤務することになりました。研究所ですから研究もしますが、会議やイベントをまわすことも同様に重要な仕事でした。私は博士課程に進んで以来、アメリカの共産党を思想史の中で捉えたい

かと思いついていました。かなり浮世離れたテーマです。そんな自分が、新聞社で働き、政府の仕事をし、シンクタンクで政策研究とイベントの企画をする。自分では想像もしていなかったキャリア・パスです。一方で、博士論文の方も仕上げなければと執筆を続け、どうにか完成させることができました。

その後、二〇〇六年には大学に勤務することになり、それ以降は大学を拠点にしています。SFC

には昨年の四月に着任しました。――どうして専ら研究をする立場から教える立場へスタンスを移されたのですか。

若いときはがむしやりに研究をしていましたが、それは体力勝負みたいなところがありました。だから、もうちょっとゆっくりした時間のなかで若い人たちと交流をしつつ、自分の研究をしていくという環境に惹かれたんです。実は、シンクタンクで働いていた頃に、SFCで非常勤講師をした経験があります。非常に印象深い体験でした。とにかく学生が発言するのが大きな驚きでした。

私自身、大学のときにたまたま教えを受けた先生に強い影響を受けた経験があるので、私も学生たちにいい刺激を与えられたいなと思います。研究会や授業で具体的に教えることはアメリカに関わることですが、それ以外の部分で、物事の考え方や見方も合わせて伝

えたいなと思います。研究会や授業で具体的に教えることはアメリカに関わることですが、それ以外の部分で、物事の考え方や見方も合わせて伝

えることができたらいいなと。

——研究会（ゼミ）ではどういったことをやっているのですか。

研究会は二つあります。一つは「アメリカと国際政治」というテーマです。今はアメリカの「衰退論」が流行っていますが、本当にそうなのか。この問題をいろいろな文献を読みながら考えていくというものです。歴史も視野に入れながら、カレントな問題を考えていきます。いまはやはりオバマ外交をどう位置づけるかというのが、大きな課題です。アメリカ衰退論の兆候なのか、それともスマートな退却主義なのか、研究会の参加者の間でも大分考え方に違いがあります。

もう一つは「アメリカにおける保守思想」をテーマにしています。アメリカの保守というと、ガン・ライツ（銃の保有権）を絶対視したり、極端な中絶反対論者だったり、少し極端な存在、社会的病理といったようなイメージで捉えて

しまう人がいます。それとは対照的にリベラルは、国民皆保険を唱え、イラクやアフガニスタンへの介入の度合いを緩め、日本人でも比較的イメージしやすい。でも、

支持するかどうかは別にして、やっぱりアメリカを理解するためには、アメリカの保守主義を理解していなければなりません。レーガン大統領以降の時代は特にそうです。研究会では、アメリカ保守主義の原典を丹念に読みこむという作業をしています。アメリカの保守主義を原典にあたって勉強しているゼミは、日本の大学でもそうは多くはないでしょう。

SFCに来てよく耳にする言葉は「コラボレーション」です。ですが、このような研究会のテーマですと、どうしても自分で文献を読み込むという作業が中心になってしまいます。ただ、そこで終わるのではなくて、互いに自分で勉強したことをぶつけ合って、螺旋階段状に知識や認識を深めていってほしい。大学教員というのはデスクジョッキー的な役割を担って

いると思っていますが、どういう本を選んでいいかわからない時、道案内役と思って気軽に声をかけてくれればと思います。

——SFC生や高校生に向けて一言お願いします。

私が高校生の頃はとにかく文芸書が好きで、本を読み漁っていました。それは文芸書を鏡にして自分を映せば、「本当の自分」が見えてくるんじゃないかと思っていたからなんです。だから読んでいる本を楽しむというよりは、自分探してみたいな気持ちで取り憑かれたように読んでいました。感覚としては、小説を読みながらたまねぎみたいに自分の表面を剥いていく感じですよ。中になにかあるんじゃないかと模索していた。でもいつまでたつても出てこないから、さらに拍車がかかって、むさぼるように読んでいました。しかし、大学で社会科学や政治学を学んだことで、自分ついでというのは内に向かつて構成されているのでは

なく、社会の網の目の上に成立する関係性のなかで存在しているのだと分かって、文芸書を取り憑かれたように読むということから解放されました。もちろん今でも小説を読むのは大好きですけども、当時とは読み方が大分違います。そのとき感じたのは、違う角度から物事を見ることや発想を転換させることの重要性です。自分が安住してしまう心地いい考え方が、実は落とし穴だったり罠だったりすることもある。だから一歩そこから飛び出して、なにか違う観点から物事を見たり考えたりすることができると、それまでの閉塞感が一気に晴れたりすることもあります。自分なりの思考パターンを確立することも大事ですが、時としてそれを一気に飛び越えられるような勇氣も大事です。

22: sfcism

Mr. Kazuhide SEKIYAMA co-founded Spiber Inc. when he was a doctoral student in 2007, and currently is the President of the company. He works on the development of spider threads made of protein, as well as city planning in Tsuruoka City, Yamagata Prefecture.

26: When I was young

Born in Utah and embraced by mother nature as a child, Associate Professor Thomas HARDY, who teaches English with Cultural Anthropology at SFC, experienced cultural differences first-hand by studying abroad in Japan. We interviewed him about his career and his seminar.

29: New Comers

SFC is always interested in finding new areas of study, and the lineup of faculties are constantly changing, and new faculties are introduced to the campus every year and term. In this volume, we would like to introduce Assistant Professor Hisashi MIZUTORI and Professor Toshihiro NAKAYAMA.

Assistant Professor Hisashi MIZUTORI is a researcher specializing in the process of skill expertization, based on his experience as an Olympic gymnast.

Professor Toshihiro NAKAYAMA holds a seminar on American politics, specifically on conservative ideology in the United States.

34: Abstract SFC REVIEW 57

36: From Editor

Abstract SFC REVIEW

Table of Contents

57

02: The Path that lies ahead of the Students at SFC

At SFC, a diversity of cutting-edge knowledge is taught. That's why we, SFC students, feel distressed and confused when it comes to our future career design. While some successfully match their current research to their career, others think different, separating careers from research. In this special feature, we asked Project Professor Shunsuke TAKAHASHI, who teaches career theory at SFC. Moreover, we asked four graduates on how they contemplated their future, and how they came upon their decisions on it. The four are: Ms. Yumiko ISHIKAWA, an editor at Chuokoron-Shinsha, Inc.; Mr. Yoshiteru UNO, the Director of Public Relations Office at The Ministry of Health, Labour and Welfare; Ms. Ayaka ITO, a doctoral student researching Intercultural Communication; and finally, Mr. Mitsuhiro SUWA, the Co-Founder and President of Loftwork Inc. In addition, we will also introduce the CDP Office, which has been directly involved with the career counseling of SFC students for years.

16: The Series of Miraisozojuku Vol.1

As SFC's new campus, Miraisozojuku is currently in its planning phase. However, not much information has been released about Miraisozojuku, and many of the students and alumni have yet to recognize it. We interviewed Mr. Daisuke YANASAWA and Mr. Junichi SAKAGUCHI of KAYAC Inc. about "Legend of Failure", a unique project regarding donations for Miraisozojuku, launched together with Professor Yutaka MURABAYASHI of SFC. We asked them about the involvement of alumni in the making of Miraisozojuku.

18: The neighbor laboratory

In SFC, a place where everyone can study freely about all kinds of things, seminar is the core of the curriculum. Students learn the wide world of academics through each class, and deepen them in the individual seminars that each professor has. Of course, choosing which seminar to join is an important and difficult decision that one has to make. In this volume, we interviewed Associate Professor Jin MITSUGI and Professor Mutsumi IMAI about their seminars.

Associate Professor Jin MITSUGI runs a project that spans from agriculture to home healthcare using the technologies derived from his research on wireless internet.

Professor Mutsumi IMAI specializes in cognitive psychology and psycholinguistics, especially second-language acquisition and researches on the connection between education and child development.

発行人

奥田 敦 (湘南藤沢学会会長)

編集長

佐藤 響子 (環境情報学部 2年)

副編集長

林田 早紀子 (環境情報学部 2年)

坂本 美佳 (看護医療学部 1年)

編集スタッフ

藤吉 賢 (環境情報学部 4年)

武藤 真理子 (環境情報学部 3年)

中村 幸嗣 (総合政策学部 2年)

湘南藤沢学会

KEIO SFC REVIEW 担当幹事

堀 茂樹 (総合政策学部教授)

事務局

田坂 真美

From Editor

お手にとってくださった方、読んでくださった方、
どうもありがとうございました。57号はいかがでした
でしょうか？

今回は、特集のひとつとして「SFC生の進路」を
取り上げました。私は今二年生で、もうすぐ三年生に
なろうとしています。就職活動のはじまりの時期は少
し遅くなったようですが、そんなことも関係なく今年
の夏はサマーインターンなどで辺りが騒がしくなるの
だろうなあと、わくわくするのではなく、少しうんざ
りしてしまっています。それはやっぱり、「学生」と
いうなんでもできる時期を終えて「社会人」として過
ごしていかなければならないことに対して、どこかで
まだ自分の覚悟が決まっていないからなのだろうと思
います。

特集を執筆するにあたって、4人のOBの方々にイン
タビューをさせていただきました。学生の私からして
みれば、充実した日々を過ごしているOBの方々はとて
もまぶしく、一体どんな大学生活を送ってきたのだろ
うと少し怖じ気づいておりました。しかし、4人の方
々が異口同音におっしゃっていたのは、「大切なのは大
学生生活を精一杯楽しむこと」。そうだとすれば、自分
には才能がないから……とか、やれることなんてない
から……などと思考停止してしまうのは簡単ですが、
現在の学生生活のなかで自分は何をしたいと思ってい
るのか、何をしているのか、限りある時間を用いて自
分を振り返ってみることが大切なのかもしれません。
周りの雰囲気の影響されて焦っていた私は、「なんとか
なるからこのまま頑張ってみな」と背中を押されたよ
うな気がしました。

KEIO SFC REVIEWは大学生だけではなく、高校生
にも読んでいただいています。将来について漠然たる
不安を抱えている方々が、この一冊のなかに少しでも
ヒントになるようなことを見つけてくれるといいなと
願っています。

2015.02.08 佐藤 響子

発行日

2015年3月20日

発行所

慶應義塾大学 湘南藤沢学会

〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤 5322

0466-49-3437

<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/>

gakkai@sfc.keio.ac.jp

製作・印刷

株式会社ワキプリントピア

〒252-0815 神奈川県藤沢市石川 6-26-19

0466-87-5811

<http://www.printpia.co.jp/>

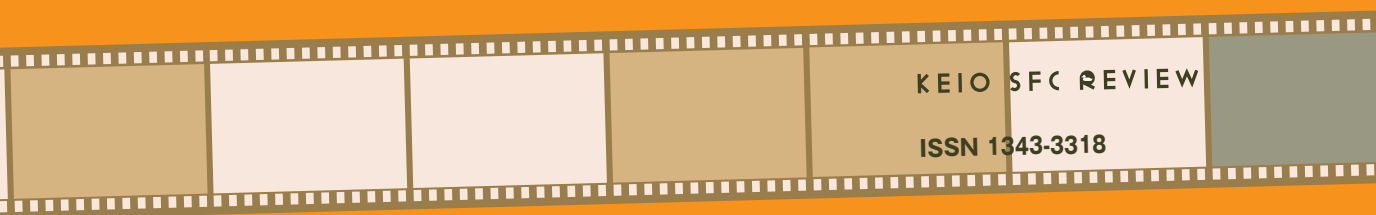
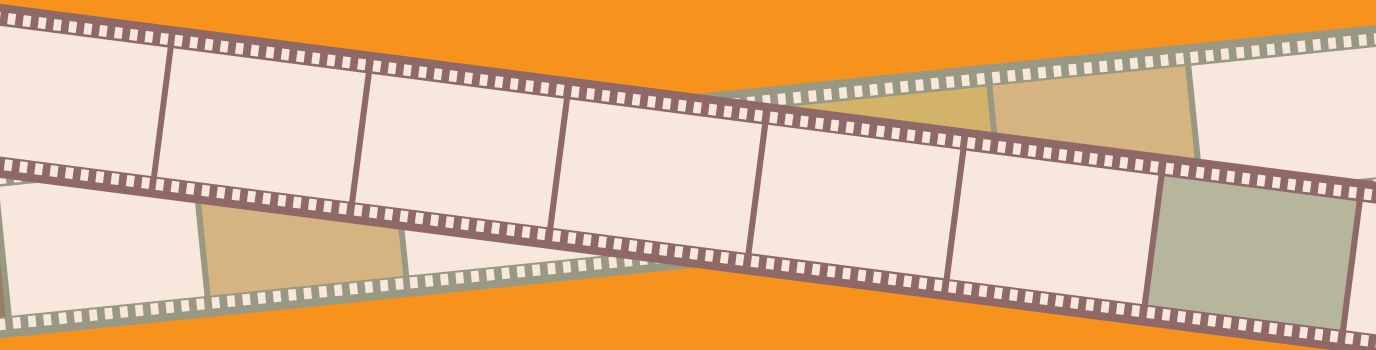
無断転載・複製を禁じます。

ご相談は慶應義塾大学 湘南藤沢学会までお寄せください。
最新号およびバックナンバーをご希望の方は湘南藤沢学会まで
ご連絡ください。

KEIO SFC REVIEW は
学生編集スタッフを募集しています。

興味のある方は、keio-sfc-review@sfc.keio.ac.jp
までご連絡ください。

募集中



KEIO SFC REVIEW

ISSN 1343-3318